

主に寄り頼む者の幸い

詩篇146篇

ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主におく人はさいわいである。(5)

本篇から一五〇篇までの五つの詩は、いずれも初めと終わりに「主をほめたたえよ」という呼びかけがなされています。この五つはまとめて「ハレルヤ詩篇」と呼ばれます。

この詩は「捕われ人」(7)などの表現にもあるように、バビロン捕囚の後の作ではないかと考えられています。その苦しい捕囚から解放されて帰国した人々も、それで問題が解決したわけではありませんでした。「飢えた者に食物を与えられる」(7)とあるように、人々は日々の生活にも苦勞するほどでした。そのような中、詩人は人間に頼ろうとする心を戒めます。「もろもろの君に信頼してはならない。人の子に信頼してはならない。彼らには助けがない。その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」(3、4)。いざというとき、人間は頼りにならないというのです。はかない命の人間に対してではなく、主なる神に信頼するように勧めます。主を頼りにするとき、たとえどのような状況に陥つたとしても決して絶望することはないからです。

様々な問題に直面するとき、わたしたちはまず誰を頼りにするでしょうか。被造物に過ぎない存在にでしょうか。それとも、世界の全てを造られた主なる神に望みをおいでしているでしょうか。今日も、主に心からの信頼を寄せようではありませんか。